
 ニ ュ ー ス

日本の火山活動概況（2010年1月～2月）



図 1. 2010年1月～2月に目立った活動があった火山

十勝岳 (43°25′05″N, 142°41′11″E)

2月16日に、振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が3回発生し、その後、火山性地震がやや増加したが、噴煙の状況に特段の変化はなかった。火山性微動の発生は、2009年10月27日以来である。地震活動は、2月16日以外は低調に経過した。

2月24日に北海道の協力により実施した上空からの観測では、62-2火口の噴煙の高さは、火口上約100m、大正火口や旧噴火口の噴煙の高さは数十m程度で、噴煙の状況や地熱域の状況に特段の変化はなかった。

GPSによる観測では、62-2火口浅部の膨脹を示す局所的な地殻変動が2006年以降継続している。

樽前山 (42°41′26″N, 141°22′36″E)

2月21日に、振幅のやや大きな火山性地震が発生し、その後、傾斜計に山上がりのわずかな変動が観測された。地震発生前後の噴煙の状況に変化はなかった。火山性地震は、2月8～9日に一時的にやや増加したが、その

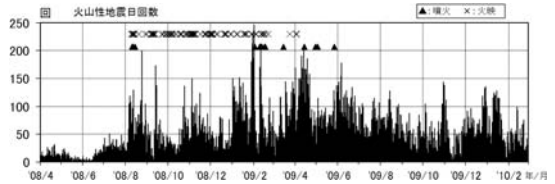


図 2. 浅間山 火山性地震の日回数（2008年4月1日～2010年2月28日）

他の日は一日あたり9回以下と概ね低調に経過した。

2月15日に、北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、A火口及びドーム南東亀裂周辺では地熱域に対応した融雪域が確認され、地表面温度分布は、2008年3月の観測と比べて地熱域の拡大が認められた。また、A火口周辺の熱活動は引き続きやや高まった状態で経過している。

2月23日には、振幅の小さな火山性微動が発生した。微動発生前後の噴煙の状況は雲のため確認できなかったが、空振計や傾斜計の記録に特段の変化はなかった。火山性微動の発生は、2009年10月23日以来である。

噴煙活動は低調な状態で経過した。

GPSによる観測では、山頂火口原内の溶岩ドームの地下浅部の膨脹を示す局所的な地殻変動が2006年以降継続していると推定される。

吾妻山 (37°44′07″N, 140°14′40″E)

1月29日05時頃に継続時間がそれぞれ2分34秒及び1分09秒の火山性微動を観測した。火山性微動の発生は2004年11月23日以来である。同日福島県警察本部が上空から撮影した画像によると、新たな噴気や、地熱域の変化による融雪域の拡大等は確認されず、表面現象に異常は認められなかった。

大穴火口の噴気は、50～300mで推移し、噴気活動はやや高まった状態が続いている。

地震回数は、1月97回、2月52回と引き続きやや多い状況で推移した。

浅間山 (36°24′23″N, 138°31′23″E)

山頂火口からの噴煙量は2009年4月以降大きな変化はなく、噴煙高度は火口縁上50～200mで推移した。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中2回実施）では、一日あたり500～1,100トンと2009年2月の噴火以降放出量は減少しているが、

2008年7月以前と比べて多い状態が続いている。

火山性地震はやや多い状態が続いているが、火山性微動は観測されなかった。

山体周辺のGPS連続観測では、2008年7月初め頃からみられていた深部へのマグマの注入を示す伸びの傾向は、2009年7月頃から鈍化し、現在はほぼ停滞している。

三宅島 (34°05'37"N, 139°31'34"E)

噴煙高度は火口縁上100~300mで推移した。

島内で実施した、COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中2回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あたり600~2,000トンと、依然として多量の火山ガス放出が続いている。

三宅村の火山ガス濃度観測によると、山麓で時々高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

山頂火口直下を震源とする火山性地震は、増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。

1月29日に実施した上空からの観測(陸上自衛隊の協力による)では、山頂火口南側内壁に位置する主火孔及びその周辺の地表面温度分布に特段の変化はなく、高温状態が続いていた。

全磁力連続観測では、火山体内部の熱の状況に大きな変化はなかった。

GPS連続観測では、山体浅部の収縮を示す地殻変動が継続している。

硫黄島 (24°45'03"N, 141°17'20"E (摺鉢山))

2月12日の上空からの観測及び2月13~14日の現地調査(いずれも海上自衛隊の協力による)では、2009年7月27日の観測と比べ、硫黄ヶ丘、摺鉢山、阿蘇台陥没孔、井戸ヶ浜、漂流木海岸、北ノ鼻付近、離岩温泉跡及び金剛岩付近の噴気、及び地表面温度分布の状況に大きな変化は認められなかった。また、島西部の阿蘇台陥没孔で、前回(2009年7月27日)同様、孔の中に溜まっている熱水の水位は低い状態で、ごく小規模な泥混じりの熱湯の噴出が時々みられた。

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によると、地

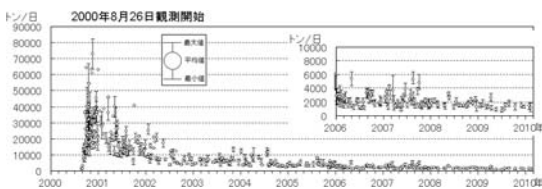


図3. 三宅島 火山ガス(二酸化硫黄)放出量の変化(2000年8月26日~2010年2月28日)

震活動は落ち着いた状態で経過している。

国土地理院の観測によると、2006年8月以降見られている島全体が隆起する地殻変動は、現在停滞しているが、島内南北方向の伸びの傾向は継続している。

福德岡ノ場 (24°17.1'N, 141°28.9'E)

第三管区海上保安本部によると、2月3日07時45分頃、福德岡ノ場で爆発音とともに白色の噴煙が上がっているのが確認された。また、同日10時頃に灰色の噴煙が確認されたほか、14時27分頃にも、噴火による灰色の噴煙が海面から約100m上がり、周辺海域に変色水と浮遊物が確認された。

海上保安庁による2月4日の観測では、黄褐色、茶褐色、褐色及び乳白色の変色水が確認された。また、変色水域では熱水の上昇がみられ、上昇に伴う軽石も噴出していた。



図4. 2月3日14時27分頃(第三管区海上保安本部提供)
灰色の噴煙が海面から約100mまで到達



図5. 2月5日13時22分頃(第三管区海上保安本部提供)
灰色の変色水と水蒸気を伴う浮遊物

福徳岡ノ場で海底噴火が確認されたのは、2005年7月2～3日の噴火以来である。同海域では、その後もしばしば変色水や浮遊物が観測されている。

2月12日に海上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、変色水は2ヶ所から湧出していた。湧出域では気泡が確認されたが、噴気や浮遊物は認められなかった。また、海水面の表面温度を測定したところ、湧出域では周りの海水よりわずかに高い温度を示したことから、周囲の海水より温度の高い熱水が湧出していると考えられる。

その後、2月13、17日の第三管区海上保安本部及び2月25日の海上保安庁により実施された観測でも引き続き変色水が確認されている。

阿蘇山 (32°53'01"N, 131°05'49"E (中岳))

夜間に行った現地調査で、南側火口壁の噴気孔において火災現象及び赤熱現象を観測した。いずれも火口内で発生した局所的な活動と考えられる。

孤立型微動は多い状態で推移した。

中岳第一火口の湯だまり量及び表面温度には大きな変化はなかった。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中4回実施)では、2月3日及び2月24日の二酸化硫黄放出量は一日あたり300～400トンと1月(400～500トン)に比べて少ない状態で経過した。

全磁力連続観測では、中岳第一火口の北西側火口縁にある観測点において、2006年夏頃から全磁力が増加し、その後停滞していたが、2009年9月頃からは火山体内部の温度上昇の可能性を示唆する増加傾向が続いている。

桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

昭和火口では、噴火回数の多い状態が続いている。1月は噴火が149回(そのうち爆発的噴火は131回)、2月は噴火が154回(そのうち爆発的噴火の発生回数は120回)発生した。これらの噴火で、大きな噴石が3合目(昭和火口から1,300～1,800m)まで達した。2月13日05時49分の爆発的噴火では、火砕流が火口周辺にとどまる程度(昭和火口の南東側約500mの範囲)に流下した。また、同火口では、夜間に高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映が、時々観測された。

南岳山頂火口では、噴火は発生しなかった。

1月26日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、南岳山頂火口及び昭和火口の状況に大きな変化は認められなかった。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中7回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あ

たり700～2,300トンとやや多い状態で推移した。

国土地理院によるGPS連続観測では、始良カルデラ(鹿児島湾奥部)の膨張による変化が引き続き観測されている。

薩摩硫黄島 (30°47'35"N, 130°18'19"E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動はやや高い状態が続いており、噴煙の高さは火口縁上概ね100mで推移した。

1月26日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、硫黄岳山頂火口及びその周辺の状況に大きな変化はなく、硫黄岳山頂火口から白色の噴煙が上がっているのが確認された。

火山性地震はやや多い状態が続いている。

口永良部島 (30°26'36"N, 130°13'02"E (古岳))

1月17～22日にかけて、新岳火口直下を震源とする火山性地震が一時的にやや増加した。2月13日から再び火山性地震が一時的にやや増加し、その後は増減を繰り返している。また、火山性微動はやや多い状態で経過した。1月26日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、新岳火口及びその周辺の状況に大きな変化はなく、新岳火口から白色の噴煙が上がっているのが確認された。2月24日に実施した現地調査では、新岳火口内から引き続き白色の噴煙が上がっているのが確認された。また、火口内の地表面温度分布は、前回(2009年8月)と比較して、一部で地熱域の広がり認められた。

GPSによる地殻変動観測では、火山活動によると考えられる変化は認められなかった。

諏訪之瀬島 (29°38'18"N, 129°42'50"E (御岳))

諏訪之瀬島では長期にわたり噴火を繰り返している。御岳火口では、小規模な噴火が断続的に発生し、そのうち爆発的噴火が1月に64回、2月に42回発生した。

1月4日に第十管区海上保安本部の協力により実施した上空からの観測及び、1月26日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、御岳火口及びその周辺の状況に大きな変化はなく、御岳火口から白色の噴煙が上がっているのを確認した。

火山性地震及び火山性微動は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いている。

(お知らせ) 最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

URL http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm

(文責: 気象庁地震火山部火山課 岡垣晶子)

○教員公募

【東京工業大学大学院理工学研究科】

1. 募集人員 地球惑星科学専攻専任助教 1名
(任期5年, 再任1回可3年)
専門分野: 地球惑星電磁気学
 - (1) 理論, シミュレーション, データ解析等について教育研究を行う方
 - (2) 自分の専門分野だけでなく本専攻の他分野にも広く関心を持ち, 他研究室との共同研究に積極的に取り組む方
 - (3) 大学院・学部の教育研究を通して次世代研究者育成に意欲的に取り組む方

なお, 再任の場合は規則に基づく審査があります。
2. 応募資格: 博士学位を有する方, あるいは2010年3月までに博士学位取得見込みの方
3. 着任時期: 採用決定後, できるだけ早い時期を希望します。
4. 提出書類
 - (1) 履歴書 (市販のもので可)
 - (2) これまでの研究・教育の実績 (1,200字程度)
 - (3) 今後の研究・教育の計画・抱負 (1,200字程度)
 - (4) 研究業績リスト
 - A. 査読付き原著論文, B. プロシーディングス, 総説など, C. 著書, その他特記すべき出版物 (注)

A, B, C いずれも和文のものは和文名で表記すること。
 - (5) 主な原著論文の別刷 (コピー可) 3編以内
 - (6) 応募者について参考意見をうかがえる方 (2名) の氏名および連絡先 (所属, 住所, E-mail)
 - (7) 応募書類は返却いたしません。こちらで責任を持って処分させていただきます。
5. 応募締め切り: 2010年3月31日 (水) 必着 「宅配便」にて送付願います。
6. 応募書類の送付先
〒152-8551 東京都目黒区大岡山 2-12-1 I2-20
東京工業大学 大学院理工学研究科 地球惑星科学専攻 秘書室 (209号室) 気付 井田 茂 宛
Tel: 03-5734-2339
7. 問い合わせ先 井田 茂
E-mail: ida@geo.titech.ac.jp Tel: 03-5734-2620
8. 本専攻教員等については下記ホームページをご覧ください。

<http://www.geo.titech.ac.jp>

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに2月23日送信しました)

○ 教員の公募

【京都大学理学研究科地球熱学研究施設】

1. 職種・人員: 京都大学大学院理学研究科 助教 (1名)
2. 専門分野: 火山活動論または火山構造論研究分野
火山の活動や構造を, 地震・地殻変動などの観測を通して総合的に理解する研究および教育を推進できる方
なお, 理学研究科では, 研究科附属施設の整備を進め, 教育研究の高度化に資することとしてきた。本施設は, 地球惑星科学専攻の一員として「水・熱フロー」をキーワードとした多目的野外観測拠点を形成し, 活地球圏における物質とエネルギーの循環過程の理解を深めるとともに, 京都キャンパスにおける地球熱学の基盤教育研究拠点を形成して若手研究者育成に努めてきた。これらの観点から, 本施設が位置する九州地域の火山や熱的特性を活かした研究・教育や京都キャンパスでの教育・研究の進展に寄与できる方が望ましい。採用後は, 大学院理学研究科地球惑星科学専攻の教育・研究に従事する。
3. 着任地・時期:
地球熱学研究施設, 主な勤務地は火山研究センター (阿蘇: 参考資料参照)
採用決定後, できるだけ早い時期
4. 応募資格:
博士学位を有すること (2010年3月31日の時点で取得見込を含む)
5. 応募書類:
 - (1) 履歴書 (氏名, 生年月日, 年齢, 現住所, 連絡先および e-mail, 高校卒業から最終学歴まで, 職歴, 資格等)
博士学位 (名称, 取得大学, 取得年月日, 論文名)
 - (2) 研究業績目録
 - A. 査読のある論文や総説, B. 査読のない論文や総説, C. 著書, D. その他の出版物等で特に参考となるもの
 - (3) 主な論文の別刷または著書 3編以内 (複写可)
 - (4) これまでの研究経過 (2000字程度)
 - (5) 今後の研究および教育についての計画と抱負 (2000字程度)
 - (6) 本人について参考意見を述べられる方2名の氏名・連絡先
6. 応募締め切り: 2010年4月5日 (月) 必着 教員公募関係と明記し, 簡易書留にて郵送すること
7. 書類の送付先および問い合わせ先:
〒874-0903 大分県別府市野口原

京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設
竹村恵二

電話 0977-22-0713

e-mail takemura@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp

*なお、選考過程で、選考委員会による候補者インタビューを実施することがある。

施設の概要はホームページ <http://www.vgs.kyoto-u.ac.jp/> をご覧ください

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに2月26日送信しました)

○特任教員公募

【東京大学地震研究所】

1. 公募人員：特任助教 1名

2. 所 属：数理系研究部門

3. 研究分野：シミュレーション火山学

地震研究所では、火山噴火予知研究の一環として、継続的な火山観測研究を進めるとともに「火山噴火・火山現象のモデリング」の研究をすすめてきた。この火山噴火モデルを進展させ、「観測と比較可能なモデル予測」を得るための大規模計算を含む先端的な数値的研究を推進する人材を募集する。上記の研究を遂行する上で、火山学、流体力学のみならず、最先端の計算科学に関する高い専門知識と技術を有する事が期待される。また、採用後は本学教授・准教授と協力して、大学院教育にも携わる事も期待される。

4. 採用予定時期：決定次第できるだけ早い時期。

5. 応募資格：博士の学位を有する者（外国での同等の学位を含む）。

6. 任期について：

本公募は、科学技術振興調整費「若手研究者自立促進プログラム」に基づいて行うテニュアトラックポスト（5年任期）の公募であり、採用後、2年から5年の間にテニュア審査が行われ、任期のない助教への採用可否が決定される。

7. 提出書類：

- (1) 履歴書（市販用紙可）
- (2) 業績リスト（査読の有無を区別すること。投稿中の論文も含む）
- (3) 主要論文の別刷り3編程度（コピー可）
- (4) 研究業績の概要（2000字程度）
- (5) 今後の研究計画（2000字程度）
- (6) 応募者について参考意見をうかがえる方（2名）の氏名と連絡先と e-mail

8. 公募締切：2010年4月20日（火）

9. 問い合わせ先：東京大学地震研究所地震火山噴火予知

研究センター 武尾 実

TEL：(03)-5841-5707

E-mail：takeo@eri.u-tokyo.ac.jp

10. 応募書類提出先：

〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学地震研究所 庶務チーム（人事）宛

封書を用い、表に「シミュレーション火山学特任助教応募書類」と朱書し、書留郵便で送付してください。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに3月8日送信しました)

○研究員（研究機関）の公募

【京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設】

募集人員：研究員 1名

研究分野：本施設の研究者と協力して、施設が行っている研究分野あるいは、その関連分野における研究を進展させると共に、地球熱学の新しい領域を開拓する意欲的な方を歓迎する。

現在、本施設に所属している研究者やその研究分野等の詳細については、HP等 <http://www.vgs.kyoto-u.ac.jp> を参照のこと。なお、応募にあたっては、本施設の教員と必ず事前に連絡を取り、研究プロジェクトについて相談すること。適任者が見出せない場合は、施設長（takemura@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp）と相談すること。

応募資格：着任の時点で、博士学位を有すること。

勤務地：地球熱学研究施設（大分県別府市）又は火山研究センター（熊本県阿蘇郡）

着任時期：平成22年6月1日以降の出来る限り早い時期。

採用予定期間：原則として採用日より2年間（3年まで更新可）

待遇等：(1) 身分；研究員（研究機関）

(2) 給与 月額約30万円

応募期限：平成22年4月12日（月）

応募書類：

1. 履歴書 氏名、生年月日、住所、連絡先（電話および e-mail も記載）
学歴 高校入学以降の入学年月日、卒業年月日
職歴
資格
賞罰 学会賞など
2. 業績目録 査読論文、査読なし論文、学会発表など <博士号（題目、取得大学、時期も記載）>
3. 研究の概要および今後の研究の抱負（各 A4、1枚程度）

4. 主要論文 3 編以内

応募方法：上記書類を PDF ファイルで下記応募先に送付すること。

e-mail takemura@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp

問い合わせ先：

〒874-0903 大分県別府市野口原
京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究
施設 竹村恵二
電話 0977-22-0713 (別府)
075-753-3940 (京都分室)

e-mail takemura@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp

なお、本研究員（研究機関）ポストは、「*現在、本研究員ポストについて検討中で、システムが変更になる可能性があり、京都大学からの平成 23 年度非常勤研究員経費が来なくなる場合もある。」の文章を付記させていただきます。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 3 月 24 日送信しました)

○防災科学技術に関する国際的な研究事業・交流に関する調査のお願い

【文部科学省地震・防災研究課 防災科学技術推進室】
文部科学省研究開発局地震・防災研究課防災科学技術推進室では、「防災分野の研究開発に関する委員会」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/002/index.html)において、防災科学技術の国際展開を推進するにあたっての重要事項の調査検討を現在実施しております。

検討にあたっては、貴研究機関での現在実施中または近い将来実施予定の防災科学技術に関する国際的な研究事業/交流/留学生受入れ・派遣についての情報を参考としたい所存です。

関係する情報がございましたら、お手数ですが、下記の項目にご記入して頂き、3/5（金）までに、下記返送先に、ご回答を送付していただければ幸いです。

- ・共同研究事業/国際交流事業/留学生受入・派遣/その他（いずれかに○）
- ・実施研究機関（大学）名：
- ・研究代表者：
- ・相手国：
- ・相手国研究機関（大学）名：
- ・日本側の共同研究者（あれば）：
- ・研究事業・交流名（研究課題名）：
- ・実施（予定）期間：
- ・実施にあたっての資金：
- ・具体的な実施事項：

・その他コメント：

返送・問い合わせ先 文部科学省研究開発局地震・防災研究課防災科学技術 推進室

担当：山田（k-yamada@mext.go.jp）

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 2 月 23 日送信しました)

○国際ワークショップ開催のお知らせ

「21 世紀モホール計画：掘削候補地点絞り込みのための国際ワークショップ」

“The MoHole : A Crustal Journey and Mantle Quest”

地球深部探査船「ちきゅう」を用いて、海洋地殻を完全掘削し、モホ面を貫通して最上部マントルにまで到達するモホール計画の実現に向けて、掘削地点を絞り込み、事前調査体制と科学目標を達成するための技術開発ロードマップを作成する国際ワークショップを開催します。

本ワークショップは、モホール計画の実質的なスタート地点となるきわめて重要な集会です。

詳しくは「21 世紀モホール計画」のホームページ（下記 URL）を参照してください。

<http://earth.s.kanazawa-u.ac.jp/~Mohole/>

開催日：平成 22 年 6 月 3 日～5 日

開催場所：石川県金沢市文化ホール

共同主催：金沢大学、日本地球掘削科学コンソーシアム (J-DESC)、国際統合深海掘削計画 (IODP)、日本海洋研究開発機構 (JAMSTEC)、インターリッジ (InterRidge)

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 3 月 2 日送信しました)

○シンポジウムのご案内

シンポジウム「地殻流体活動としてみた松代群発地震」

主催：新学術領域研究「地殻流体」

共催：産業技術総合研究所地質調査総合センター

日程：3 月 25 日（木）13：00～17：45

会場：産業技術総合研究所第 7 事業所別棟大会議室 (7-3 C211)

プログラムは以下のリンク先をご覧ください

<http://www.geofluids.titech.ac.jp/sub9.html>

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 3 月 3 日送信しました)

○シンポジウムのお知らせ

火山学会員の皆様

下記のように「地震・火山噴火予知のための観測研究計画」平成 21 年度成果報告シンポジウムを開催します。

ご興味のある方は、ご自由にお越し下さい。

記

地震及び火山噴火予知のための観測研究計画

平成 21 年度成果報告シンポジウム

主催：地震及び火山噴火予知のための観測研究計画

平成 21 年度成果報告シンポジウム実行委員会

共催：地震・火山噴火予知研究協議会

後援：文部科学省

日程：3月3日（水）13：00～5日（金）12：00

会場：東京大学地震研究所 第一会議室（2号館5階）

及びポスター会場（1号館7階）

プログラムは以下のリンク先をご覧ください

http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/YOTIKYO/nenji/symposium_h21.html

（上記のお知らせは火山学会メーリングリストに2月16日送信しました）

日本火山学会員の皆様

第6回火山都市国際会議（Cities on Volcanoes 6 テネリフェ大会）の早期登録および講演要旨申し込みが2月28日と迫っています。以下のサイトに情報がありません。ふるってご参加下さい。

早期登録・講演申込締め切り：2月28日

会期：5月31日～6月4日

<http://www.citiesonvolcanoes6.com/>

IAVCEI 会長 中田節也

（上記のお知らせは火山学会メーリングリストに2月17日送信しました）

○特定非営利活動法人日本火山学会理事選挙について

2010年2月26日

会員各位

特定非営利活動法人日本火山学会

選挙管理委員会委員長

小川康雄

日本火山学会理事選挙規程に基づき、次期理事の立候補を受け付けましたが、下記に示す13名より立候補の届け出がありました。立候補受付のお知らせで通知しましたように、次期理事定員は14名以内としていましたので、会員による投票は行わず、下記の立候補者13名を次期理事候補とし、5月の連合大会の際に開催される次期総会においてお諮りし、選任していただくこととします。

次期理事候補者（あいうえお順）

1. 井口正人 京都大学防災研究所
2. 宇都浩三 産業技術総合研究所
3. 大湊隆雄 東京大学地震研究所
4. 金子隆之 東京大学地震研究所
5. 篠原宏志 産業技術総合研究所
6. 寅丸敦志 九州大学大学院理学研究院
7. 中田節也 東京大学地震研究所
8. 中村洋一 宇都宮大学教育学部
9. 林信太郎 秋田大学教育文化学部
10. 藤田英輔 防災科学技術研究所
11. 星住英夫 産業技術総合研究所
12. 松島 健 九州大学地震火山観測研究センター
13. 森 俊哉 東京大学大学院理学系研究科

以上

（上記のお知らせは火山学会メーリングリストに3月2日送信しました）